

2021年度

【学校推薦型選抜〈併願型〉(2日目)】

【学校推薦型選抜〈専願型〉】

基礎素養検査

2 限 目

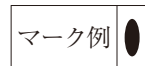
注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は1部、解答用紙は2枚です。なお、解答用紙は、「国語」用の『解答用紙①』と「理科」用の『解答用紙②』の2種類があります。解答用紙は、試験終了後に2枚とも提出いただきますので、2枚ともに受験番号欄に記入およびマークしてください。
3. 出題科目、ページおよび選択方法は、下表のとおりです。

出題科目		ページ	選択方法
理科※	物理基礎	1 ～ 4	解答科目は、選択できる科目を受験票で確認のうえ、選択しなさい。
	化学基礎	5 ～ 7	
	生物基礎	9 ～ 14	
国語		国語 1 ～国語13（うしろから始まります）	

※理科については、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」から2科目選択し、解答してください。解答する科目の順番は問いません。解答時間（60分）の配分は自由です。

4. 解答は全てマークセンス方式です。マークは黒鉛筆(シャープペンシル可)で右の例のように正しくマークしてください。



5. 解答用紙には解答欄のほかに次の記入欄があります。

(1) 受験番号欄

『解答用紙①』および『解答用紙②』の2枚ともに、受験番号を受験番号欄の上欄に算用数字で記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

(2) 解答科目選択欄

①「国語」を解答される方

『解答用紙①』の解答科目選択欄について、「解答をする」のマーク欄にマークするとともに、解答する科目を○で囲み、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

②「理科」を解答される方

『解答用紙②』の解答科目選択欄について、「解答をする」のマーク欄にマークするとともに、解答する科目(2科目)を○で囲み、さらにその下のマーク欄にマークしてください。

※受験番号および解答した科目が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

6. 記入したマークを訂正する場合は、プラスチック製消しゴムで完全に消し、改めてマークしてください（消しくずを残さないこと）。
7. 解答用紙は折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
8. 解答用紙の※印欄はマークしてはいけません。
9. 問題冊子と解答用紙にページの落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所や汚れなどがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
10. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

国語

(解答番号)

(1)

(47)

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(六〇点)

いま、言葉の使われ方がさまざまな新しい形を見せています。たとえば携帯電話で文字による情報の交換をしたり、あるいはパソコンで文章を作成したり、またそうして作成した文章をインターネットでやりとりしたりする――。要するに、新しく開発された機械が介在することによって、私たちの身の回りにある言葉のあり方が、かつての「話す・書く」という範囲を超えた、一見、複雑なヨウソウ^Aを呈しています。

このような事態の進行に伴い、言葉あるいは日本語のありようが、いろいろな形で問題になっています。たとえば、「言葉の乱れ」を指摘し、「漢字が書けなくなったこと」を嘆くような問題意識の場合もあれば、あるいは、「美しい日本語」を言挙げ¹して、「朗読運動」を提案するといった形のものもあります。

これら言葉に関するさまざまな問題を整理しながら、「日本語とはどういう言語か」ということを問いなおしていきたいと思います。

まず、いま非常に勢いで普及しつつあるパソコンや携帯電話、そしてインターネットなどについて、少し掘り下げて考えてみましょう。²

まず確実に言えることは、これらは必ずしも、われわれ自身が言葉を使う上で欲したり、待ち望んで生まれてきた機械や通信手段ではないという事実です。これらは、われわれの生活の上での必要な速度を超えて開発された機械であり、普通の生活者の実感で言えば、ある日突然、世の中に登場してきた商品です。にもかかわらず、われわれの側は、まさに現代商品と呼ぶほかはないこれらに、最初はとまどい、一部の人は、「これは便利だ」と飛びつき、やがて、³あれよあれよという間に周囲に浸透してしまったわけです。

しかし、インターネットにせよ、パソコンにせよ、携帯電話にせよ、そしてパソコンの前段階のワープロにせよ、言葉をやりとりする道具としてはちよつとおかしな部分を含んでいます。

A

、直接に手で「漢字仮名交じり」の文章を書いていくのとはちがって、パソコンやワープロで日本語の文章を作成する場合は、まずキーでローマ字か仮名文字を打ち込み、次にその一部を漢字に変換していくという操作が加わります。また携帯電話では、数字をたくさん打ち込むことでまず仮名を出し、次にそれを漢字に変換するという、非常に複雑で歪んだ形になっています。本来なら直接に話したり書いた

I

操作が加わり、人間

が機械の機能に

II

操作者として言葉を発していかなければならないという奇妙なことになっています。

しかも、たとえば頭のなかでは「雨が降る」と書きたいと思っているにもかかわらず、手は「amegataru」とか「あめか、ふる」と打ち込まねばならないという分裂したありようは、言葉を生み出す思考の流れに反し、適切な言葉を生み出す方向へ向かう集中を妨げます。これは、言葉が発せられる本来の姿ではありません。このように考えるとき、機械が介在して発せられた言葉は、せいぜいが、本来の言葉を「代用」するものにすぎないと言えます。

実はコンピュータ、インターネットは、人間と人間が生活上の言葉をやりとりするために開発された道具や手段ではなく、軍事通信技術あるいは諜報技術に利用するため開発されたものです。私はこれらを、生活機器への「軍事通信技術のハイブリット利用」と呼んでいます。

B

発目的と商品としての利用目的の間にずれのある、言ってみれば無理な商品（機械）です。このような、ずれや無理の避けられない機械が介在することによって、人間と人間の言葉のやりとりの関係が実に妙な具合に歪んでいるわけです。

そんな「妙な」関係に、多くの人々は潜在的に気づいています。言葉の「代用」にすぎないということまでは明確に意識しないにしても、なにか異感を感じて、「ほんとうなら使わないほうがいいんだなあ」と心のどこかで思っています。とはいえ、いまやだれもが持っているといつていいほどの圧倒的な浸透ぶり⁴と、当座の⁴便利さ、さらには社会的な使用の強要を見せつけられれば、やはり使わざるを得ません。実際、これだけ普及しているながら、これだけ多くの人が気乗りのしないまま使っている商品（機械）もめずらしいのではないのでしょうか。もともと、最近では、馴^なれっこになって、自らの気乗りのしない思いの存在自体にすら気づかぬまでに至っているようです。

これらの機械は、将来、人間の生活や社会的活動において、どのような位置を占めていくべきものなのでしょうか。結論的に言えば、言葉の交通を「代用」するかぎりでは非常に便利なもので、軍事やビジネスなどの限られた分野では、使われていくでしょう。というより、むしろさらに上手く「使いこなして」いけばいいのです。しかしそれ以外の生活の局面——たとえば人間と人間が生活のなかで言葉をやりとりする、あるいは表現をする、あるいは子どもたちが言葉を覚え、それを自らのものにして自分の表現力を蓄え、そして人間として生きていく、というような局面においては、人間と人間の間に機械を介在させる機会⁵はむしろ減らして、「じかに話し、じかに書く」ことに立脚した⁵基本的な言葉の交通を促していくべきである、と私は考えています。

C

、では、「言葉」とはいったいどういうものなのでしょうか。

言葉とは人間の最も根底的な表現（表出）行動です。そしてそこから、「人間とは言葉する動物である」⁶と定義することも可能です。

よく、人間の言葉を理解する飼犬がいるとか、文字を示して人間と会話する猿がいるという話を聞きます。しかし、それは⁷しかるべき自然の現象ではなく、人間が教え込むことによってペットの犬がいくぶん人間化した姿であり、また猿がはたしてどこまで人間に似た振舞いができるかというものを教育訓練した結果にすぎず、もともと動物が自分の意思を伝えるために言葉を使うということはありません。

またイルカは言葉をもって通信しあっているというような説もあります。

D

、それは、身のあらしるモノ、コトに

III

を

与え、いわば言葉の宇宙を築きあげている人間の言葉とは次元を違えたものです。むしろ自然の動物たちは、一つの声を発するなかにすべてを言いつくしています。たとえば馬が「ヒヒーン」といなき、ウグイスが「ホーホケキョ」と鳴く。それは何かを呼んでいたり、何かを求めていたり、あるいはまったく別のことを意味しているのかもしれませんが、いずれにせよ、馬もウグイスも一声のなかに言いたいことのすべてを言いつくしています。その意味では、馬やウグイスの鳴き声を、ある種の「完全なる言葉」であると考えてもよいかもしれません。

E

人間の言葉は、一声発してそれですべてを言いつくせるというようなものではない「不完全な言葉」です。不完全で、一声ではうまく言いつくせないがゆえに、人間は、膨大な数の語彙（単語）を生み出し、さまざまな文体（言い方、表現の仕方）をつくり出し、そして、それらを長い時間をかけて際限なく積み重ね、言葉の宇宙を築き上げることによって、現在のような文化と文明を築き上げてきました。そのような「言葉」は、人間にしかありません。「人間とは言葉する動物である」とは、そういう意味です。

人間の言葉には、大きく分けて話す言葉と書く言葉、すなわち「言」と「文」があります。

当然のことながら、長い人類の歴史においては文字のない時代があり、また現在においても、文字をもたない民族・部族もあることでしょう。あるいは、現在の我々も日常生活の過半は「文」なしに大半を過ごしているともいえます。したがって、人間にとって最も本質的な言葉はあくまで「言」です。ところが人類は、歴史のある段階で「文字」を獲得しました。といっても、二百万年を超える人類史から見ればごく最近のことで、中国でいえば今から三千四百年ほど前（紀元前一四〇〇年ごろ）の殷の時代であり、エジプトやメソポタミアでもせいぜい四千年から四千五百年ほど前のことです。

しかし、文字を獲得することによって、人間は飛躍的な広がり（^C）とカソクドテキな速さで、文明というものを築き上げました。そのことの功罪は無論いろいろとありますが、人類はその恩恵を受けつつ現在にいたっています。そのため、「人類が文字を獲得し、物事を記録するようになった時代以降が歴史である」と考える人もいます。言うまでもなく、人類は文字獲得以前に長い長い歴史を持っています。しかし、文字を獲得して以後の飛躍的な展開を考えると、
「歴史は文字とともにある」と考える立場があっても不思議ではないくらい、文字Ⅱ「文」というものが人間にとって
IV 意味をもつことは
間違いありません。

それでは、さかのぼって文字を獲得する以前の人類は、「話す」ことはしたけれども、「書く」ことはしなかったのでしょうか。これについて、一般には音声言語（音声によって表される言語）はあったが、文字言語（文字によって表される言語）はなかったとされています。「文字」の有無をシビョウとする限りは、そういうことになるでしょう。しかし私は、この音声言語と文字言語を、「話す（はなす）言葉」と「書く（かく）言葉」と置き換えて考えてみます。

まず、「はなす」とはどういう行為でしょうか。これは、人間が身ぶりや手ぶりなど自分の身体や、あるいは口から発する音声を用いて、一つの表出や表現をすること。身体や音声を通じて意識を「放す」ことであり、「離す」ことであり、そして「話す」ことです。たとえば、踊りは身体動作を用いて「はなす」こと、音楽は声を出したり笛を吹いたりすることなどを通じて「はなす」こと、それでももちろん会話は声を用いて「はなす」ことです。要するに、自分の身体を用いてじかに表出、表現する行為はすべて「はなす」ことの範疇に含まれる——そう考えれば、「はなす」ことが人類の誕生とともにあったこと、また「話す」ことが身ぶりや手ぶりや表情とともにある、否、ともにしかありえない理由が納得されるでしょう。

次に、「かく」はどうでしょうか。たとえば、石や木を「引つ掻く」と、そこには何らかの図形が生まれたり、あるいは模様ができます。あるいは、同じく石や木を「欠く（欠かす）」場に、石や木の彫刻ができあがります。また、「描く」ことによって絵画のような表現も、画く（区切る）表現も生まれます。むろん文学や書は「書く」表現です。これらの「掻く」「欠く」「描く」「画く」「書く」のすべてが「かく」ことに含まれると考えれば、これもまた人類の誕生とともにあったはずで、鋤をもつて土を「掻き」耕やす（CULTIVATE）農耕はその原形と言え、そこからCULTURE（文化）の語も生れたと考えられます。

このように、「はなす」ことと「かく」ことはいずれも、人類が誕生して以来の歴史とともにあったわけです。

では、「はなす」ことと「かく」ことの違いはどこにあるか。それは、「かく」ことが道具を持つという点です。当初は石片や木切れであったことでしょ、うが、筆記具を持つ、あるいはいぶん下つては金属の鑿を持つ。道具を用いて石や木などの対象に「かく」（掻く、欠く、描く、画く、書く）。それによって、その場に何らかの痕跡を残すというかたちで表現していく——「かく」ことは、このようにして、無文字時代という長い時間の経過のなかでも積み重ねられていきました。

そして、そのような「かく」ことの長い歴史のなかから、あるとき、いちばん古い例でいえば今から三、四千年前に、「文字」が生まれたのです。

ここで忘れてならないことは、「書く」（文字）とはもともと、「かく」ことのなかの一つの形態であるという事実です。「書く」（文字）は、「かく」ことの範疇に含まれる他の表現、たとえば「描く」（絵画・文様）や「欠く」（彫刻）などと密接な関係を持ちつつ、全体として「かく」という表現世界を形成していました。それが、「文字」ができ、「書き言葉Ⅱ文」が成立したとき、絵画や文様や彫刻は「書く」（文字）ことから離れて、「描く」や「掻く」「欠く」などのそれぞれの表現として独立して行ったのです。これは「はなす」についても同様です。「文字」ができたことで、それまではある種の音楽や舞踊に近かった言葉が、明確な語彙と文体をもった言葉になり、新しい「話し言葉Ⅱ言」が成立し、また文法のナイセイ^Eテキ固定と定着も生じました。そのとき、音楽や舞踊が「話す」から別れて独立していったわけです。

このように、文字が生まれたことによって、現在のわれわれが考えるような「言」と「文」からなる言葉が独立し、また、成立したのです。

現在、世界には三千を超える言葉（言語）があるといわれています。このなかには、文字を持たない言葉ももちろんありますが、おおむね、「言」^{はなしことば}と「文」^{かきことば}の双方を持っています。

そのような世界のさまざまな文字言語のなかで、非常に大きな違いが認められるのが、東アジアで使われる「漢字」と西欧で広く使われる「アルファベット」の系統です。その違いは、普通、漢字は表意文字（一つひとつが特定の意味や概念を表す文字）であり、アルファベットは表音文字（一つひとつが音声を表す文字）であると説明されています。しかしこの区分けには、一定の意味はあるものの、多分に曖昧で不正確であり、本質的な区分法とは言えません。

X

つまり、一文字で言葉として完結した意味をもつ漢字「雨」と、語を形成する単位としてしかあり得ず、それ自体としては自立し得ないアルファベットの「R」「A」とを、同等に扱うことはできません。にもかかわらず、「雨」も「R」も等しく文字と呼び、それぞれを表意文字、表音文字と名づけることには、無理があり、混乱を招きます。

そもそも表意・表音ということでは、漢字も、一つひとつが特定の意味を指し、音をもっている点で、表意文字でもあり表音文字でもあります。たとえば、「雨」は単に意味を指し示すだけでなく、「アメ」や「ウ」という音をもっています。また、英語の「RAIN」も、このアルファベットのまとも（綴り字）によってはじめて、「雨」に相当する意味を表す言葉となるのであって、生きた言葉の中では、これ以下に分割することはできません。とすれば、表音文字と呼ばれるアルファベットに立脚する英語といえども、言葉として成り立っている限りは表意的でしかあり得ません。そう考えれば、漢字もアルファベットも表意的であり、かつ表音的、すなわち

V

文字以外ではないということになります。

漢字とアルファベットとの間の本質的な違いは、実は文字の表意・表音の違いにあるのではなく、文字としての歴史的、現存的な成り立ちの違いからきています。

アルファベットは、古代エジプトで用いられた象形文字のヒエログリフ（聖刻文字）を、フェニキア人やギリシア人が自分たちの「言」^{はなしことば}を書き写すため「発音記号」のような文字に変えたものです。つまり、表意文字（象形文字）を表音文字に変えてしまったわけで、両者間には断絶があります。こうして成立したアルファベットは、一つひとつが最小の音の単位（音素）であるところから、音素文字（表音文字体系のなかの音素文字）であるとして一般に分類されます。しかし私は、「言」^{はなしことば}の音を写し込んでいく文字という意味で、「音写文字」と呼びたいと思います。

VI

これに対して漢字は、中国・殷代の紀元前一四〇〇年ころに誕生した象形文字の甲骨文を、ほぼ一千年の年月をかけてし、文字を点画（点と線）によって表される文字へと転生させることによって生まれたものです。その際、かつての象形文字の基本的な構造が崩されずに残ったことが何より大事です。本来の表意文字である象形文字の形態が、まさに奇跡的に今日にまで続く漢字のなかに残されたのです。

ともに表意文字である象形文字に発しながら、それを発音記号ともいふべき表音音写文字に断絶的に大きく変えた西欧のアルファベット、これに対し、その表意文字としての基本的な構造を連続的に保存したまま表音文字にまで転生させた中国の漢字——これが、漢字とアルファベットとの間に横たわる本質的な違いです。

(石川九楊『日本語の手ざわり』より。ただし出題の都合上、表現を一部改めた箇所がある)

問一 二重傍線部A～Eのカタカナを漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字をふくむものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A ① ズイソウをしたためる

(1)

D ① ダイヒヨウデンを継ぐ

(4)

② ソウゴウを崩す

② スンピヨウを加える

③ セツソウがない

③ 疑問がヒヨウカイする

④ メイソウジョウキ

④ 登録シヨウヒヨウ

⑤ 作戦がソウコウする

⑤ ジヒヨウの受理

B ① ハイキン主義

(2)

E ① ゼイセイ改革

(5)

② 急なコウバイ

② タゼイにブゼイ

③ タイハイ的な風潮

③ キセイ客

④ ハイガイ主義

④ タンセイ込める

⑤ ハイシヨク濃厚

⑤ イセイシヤ

C ① フカソクな事態

(3)

② 人口カタ

③ 味方にカセイする

④ 新型コロナカに見舞われる

⑤ カチュウの人物

問二 傍線部1「言挙げして」、傍線部3「あれよあれよという」、傍線部4「当座の」、傍線部5「立脚した」、傍線部7「しかるべき」、傍線部9「多分に」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

傍線部1	① 目指して	② 特に取り立てて	③ 非難して	④ 推し広めて	⑤ 触れ回って	
傍線部3	① ぼんやりと見ている	② 意外さに驚いている	③ 様子を見守っている			
	④ 慌てふためいている	⑤ 感慨にふけっている				
傍線部4	① 実用上の	② さしあたっての	③ 使ってみてわかった	④ すぐに気づく	⑤ いつでも使える	(8)
傍線部5	① 力点を移した	② 焦点をしばった	③ もう一度立ち返った			(7)
	④ よりどころを求めた	⑤ 全幅の信頼をおいた				(9)
傍線部7	① よく知られた	② きちんと確認された	③ 常日ごろの	④ 一般的に見られる	⑤ それが当然の	(10)
傍線部9	① かなりの部分が	② おそらくは	③ 高い確率で	④ 実際には	⑤ どちらかと言えば	(11)

問三 傍線部2「いま非常な勢いで……少し掘り下げて考えてみましょう」とあるが、このことについて筆者はどのようなことを述べているか。その説明として適当なものを、次の①～⑦の中から二つ選びなさい。

- ① 本当は使わないほうがよいと気づいているとしても、社会に浸透し、使わざるをえないのだから、生活のなかでの言葉の交通の「代用」として、広く使用を促していくべきである。
- ② 軍事やビジネスなどの言葉の交通の「代用」としてはうまく活用すればよいが、生活のなかでの言葉のやりとりや、子どもの教育などにおいては、機械の介在を減らして、直接話し、書くべきである。
- ③ いずれも待ち望んで開発された機械なので、われわれはとまどいながらも、数字やローマ字を打つことのできる文字を出し、さらに漢字変換するという、本来の姿とは異なる書き方に慣れたほうがよい。
- ④ 言葉の交通の代用として使わざるをえない場面では、うまく使いこなし、生活のなかでの言葉のやりとりや、子どもたちが言葉を覚えるとき、表現力をつけていくときは、一切使わないようにすればよい。
- ⑤ まずローマ字やかな文字、数字などを打ち込んで、それをさらに漢字変換するという操作方法は、複雑で歪んだものであり、本来の言葉を書くことの代用にはならない。

⑥ 言葉のやりとりのために開発されたのではない機械が介在することで、書く操作が複雑になり、言葉を生み出す思考の流れや、言葉を生み出す集中を妨げるなど、人間と人間の言葉のやり取りの関係が歪んでいる。

⑦ 言葉を発するまでの操作が複雑で歪んだ形になっているのは、本来軍事技術、諜報技術として開発されたからであり、そのような目的にとっては使いやすい、言葉の交通の「代用」である。

問四

空欄 A

E

に入れるのに最も適当なことを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 A ① したがって

② しかし

③ たとえば

④ さらに

⑤ 言い換えれば

空欄 B ① たとえば

② にもかかわらず

③ なぜなら

④ したがって

⑤ それどころか

空欄 C ① 何はともあれ

② ということは

③ もしそうなら

④ 結局

⑤ ひるがえって

空欄 D ① というのも

② あるいは

③ たとえば

④ しかし

⑤ とすると

空欄 E ① そうはいつでも

② もっとも

③ だから

④ すなわち

⑤ ところが

(18) (17) (16) (15) (14)

問五

空欄 I

VI

に入れるのに最も適当なことを、次の各群の ①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄 I ① せわしない

② もったいぶった

③ まわりくどい

④ よどみない

⑤ まのぬけた

空欄 II ① 直属する

② 帰属する

③ 従属する

④ 所属する

⑤ 専属する

空欄 III ① 根

② 生

③ 名

④ 理ことわり

⑤ 源

空欄 IV ① 共時的な

② 先駆的な

③ 一元的な

④ 画期的な

⑤ 近代的な

空欄 V ① 表題

② 表象

③ 表語

④ 表文

⑤ 表念

空欄 VI ① 日進月歩

② 暗中摸索

③ 我田引水

④ 孤軍奮闘

⑤ 換骨奪胎

(24) (23) (22) (21) (20) (19)

問六 傍線部6「人間とは言葉する動物である」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(25)

① 飼い犬などのペットが言葉を理解しているように見えるのは、人間が教え込んだからこそできるようになったことであり、人間は言葉を使わないと動物に意志を伝えることはできないということ。

② 人間は、不完全さを補うために膨大な語彙やさまざまな文体を積み重ね、ありとあらゆるものを言葉で表せるようになったが、その言葉を使うのは、人間だけであるということ。

③ 人間は、膨大な語彙やさまざまな文体を積み重ね、言葉の宇宙を築き上げることで、文化と文明を築き上げてきたが、そのような言葉は、人間しか使っていないということ。

④ イルカのような通信ができる動物は、一つの声ですべてを言いつくす完全なる言葉を使うが、人間は不完全な言葉しか使えないので、ひたすら語彙や文体を増やして、動物との違いを示してきたということ。

⑤ 猿やイルカがどれほど人間に近づこうとしても、人間は他の動物には使えない独自の言葉を使っており、その点こそが人間の動物としての特徴であるということ。

問七 傍線部8「音声言語と文字言語を、『話す(はなす)言葉』と『書く(かく)言葉』と置き換えて考えてみます」とあるが、このことについて筆者はどのようなことを述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(26)

① 身体を用いて表出、表現する行為としての「はなす」ことよりも、石や木などに道具を使って「かく」ことのほうが古くから行われていたが、文字による「書き言葉Ⅱ文」は、「話し言葉Ⅱ言」が成立した後に独立した。

② 身体を用いて表出、表現する行為全般と言葉を話すこととの区別や、石や木などに道具を使って「かく」と文字を書くこととの区別などはなかったが、それらの区別を明確にするために、文字が生まれた。

③ 身体を用いて「はなす」ことで表出、表現されていた内容を、道具を使って石や木などに「かく」ということをしていたが、より簡便な文字ができたことで、すべての「話し言葉Ⅱ言」を「書き言葉Ⅱ文」で表せるようになった。

④ 身体を用いて表出、表現する行為は「はなす」で、石や木に道具を使って痕跡を残すことは「かく」だったが、言葉が多くの語彙や文体をもつようになると、「書き言葉Ⅱ文」が必要となり、文字が生まれた。

⑤ 身体を用いて表出、表現する行為としての「はなす」と、石や木などに道具を使って「かく」ことは、人類誕生以来行われてきたが、文字が生まれたことで、「書き言葉Ⅱ文」と「話し言葉Ⅱ言」が独立し、成立した。

問八 空欄

X

には、後のア～オの文を並べ替えた段落が入る。その並べ方として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(27)

- ① ウーイーエーアーオ
- ② ウーアーエーイーオ
- ③ オーイーアーエーウ
- ④ イーエーアーオーウ
- ⑤ ウーアーオーエーイ

ア ところが、漢字「雨」という文字が表す意味に対応する英語（アルファベットで表記される言葉です）は「R」や「A」ではなく、四字が組み合わされた「RAIN」です。

イ これは明らかにおかしいことです。

ウ なるほど、漢字「雨」は一つの表意文字であり、アルファベットの「R」や「A」はそれぞれ一つの表音文字ということになります。

エ もしも語を形成する単位にすぎないこの「R」や「A」をそれぞれ一つの文字として扱うのであるならば、「雨」の字を構成している第一画「一」（横画）や第二画「丨」（縦画）などの字画も、それぞれ一つの文字として扱わねばならないことになってしまいます。

オ 「R」や「A」はあくまでも、語を形成する一単位にすぎません。

II

次の問いに答えなさい。(四〇点)

問一

A～Cの熟語の読みとして適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|------|---|--------|---|-------|---|-------|---|------|
| A | 下戸 | ① | カト | ② | ゲコ | ③ | ゲト | ④ | ゲド | ⑤ | カコ |
| B | 出納 | ① | シユドウ | ② | スイナン | ③ | シユツドウ | ④ | シユットウ | ⑤ | スイトウ |
| C | 行脚 | ① | アンギヤ | ② | ギョウキヤク | ③ | アンキヤク | ④ | コウキヤク | ⑤ | コウギヤ |

(30) (29) (28)

問二

A～Cの四字熟語の□に入れるのに最も適当な漢字を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 周 | □ | ① | 賞 | ② | 証 | ③ | 小 | ④ | 章 | ⑤ | 省 |
| B | 天 | □ | ① | 新 | ② | 真 | ③ | 心 | ④ | 信 | ⑤ | 伸 |
| C | 不 | □ | ① | 則 | ② | 側 | ③ | 測 | ④ | 促 | ⑤ | 即 |

(33) (32) (31)

問三

A～Cの語の対義語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| A | 安全 | ① | 不安 | ② | 危険 | ③ | 困難 | ④ | 不穩 | ⑤ | 混乱 |
| B | 濃厚 | ① | 輕薄 | ② | 透明 | ③ | 希薄 | ④ | 空虚 | ⑤ | 希釈 |
| C | 散文 | ① | 長文 | ② | 作文 | ③ | 韻文 | ④ | 漢文 | ⑤ | 候文 |

(36) (35) (34)

問四

A～Cの熟語と意味的な組み立てが同じ熟語を、次の①～⑦の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A 始発駅……

(37)

B 食生活……

(38)

C 安全性……

(39)

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | 貴金属 | ② | 降雨量 | ③ | 衣食住 | ④ | 小説家 | ⑤ | 雪月花 | ⑥ | 値千金 | ⑦ | 有頂天 |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

問五

A、B、Cの慣用表現の意味の説明として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A 青菜に塩

- ① 体調が悪く、顔色がさえない様子。
- ② 元気を失って、しよげている様子。
- ③ やる気をなくしてしまっている様子。
- ④ 環境に恵まれ、生き生きとしている様子。
- ⑤ 必要なものを与えられ、力を発揮する様子。

B 他山の石

- ① 偶然見かけた人の失敗を、自分への戒めと受け取ること。
- ② 自分の力を伸ばすために、目上の行いを参考にすること。
- ③ 他人のよくない行いを、自分をよくするために役立てること。
- ④ 普段かわりのない人の行いを手本とすること。
- ⑤ 自分の利益のために、関係ない人の力をあてにすること。

C 有終の美

- ① 心配や不安が解消され、すべてがよい結末となること。
- ② いろいろ苦労しながら、結果的によい結末になること。
- ③ 最後だけは立派に見えるように取り繕うこと。
- ④ 敵対していた者同士が、最後により関係を築くこと。
- ⑤ 最後までやり通して、立派な成果をあげること。

(40)

(41)

(42)

問六

例文A～Cの波線部と意味用法が最も近いものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

例文A わが社の信用がかかった仕事だ。

- ① 調理にはかなり時間がかかる。
- ② 軽い風邪にかかってしまった。
- ③ 優勝がかかった試合に臨む。
- ④ 店内では音楽がかかっている。
- ⑤ 新人の活躍に期待がかかる。

(43)

例文B 心配してうかがったわけです。

- ① 全員が反対しているわけではない。
- ② そんなことをするわけがない。
- ③ 道理で来ないわけだ。
- ④ わけの分からないことを言う。
- ⑤ ここで引き下がるわけにはいかない。

(44)

例文C あれほど用心しろと言ったのに。

- ① 一時間ほど待たされた。
- ② のどから手が出るほどほしい。
- ③ 考えれば考えるほど分からなくなる。
- ④ ほどなく戻ります。
- ⑤ 我慢にもほどがある。

(45)

問七

例文の波線部と同じ種類の敬語を、次の①～⑦の中から二つ選びなさい。

例文 ご存じのとおりです。

- ① お慶び申し上げます。
- ② お年を召した御婦人。
- ③ まず御用件をうかがいなさい。
- ④ 減相もごさいません。
- ⑤ 両親がまもなく参ります。
- ⑥ 遠方からお越しのお客様がお待ちだ。
- ⑦ お返しするのを忘れないように。

(46)

(47)

ご注意

1. 本書の一部あるいは全部について，発行者の許可を得ずに，無断で複写・転写することは禁じられています。
2. 本書の内容に誤り・誤字脱字などございましたら，ご連絡いただけると幸いです。

2021/7/1

発行・制作:広島国際大学入試センター

連絡先:739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台555-36

TEL: 0823-70-4500 FAX: 0823-70-4518

Mail: HIU.Nyushi@josho.ac.jp

URL: <https://www.hirokoku-u.ac.jp/>

Copyright © 2021 Hiroshima International University, All rights reserved.
